

胎児救う手術可能に

出産の高年齢化と、子宮頸がん罹患の若年化により、妊娠と罹患の年代が重なるケースが増えてきた。妊婦が罹患した場合、子宮摘出などの治療のために妊娠継続をあきらめざるを得ない人も少なくない。鹿児島大学病院では2015年から九州で初めて、妊娠中でも胎児を助けながら子宮頸がん部分を切除する手術の臨床試験を始めた。

妊婦の子宮頸がん罹患増加

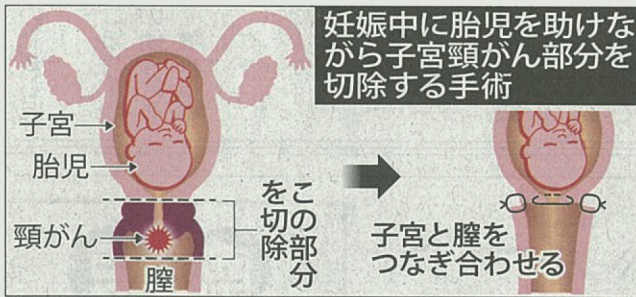


同大医学部産科婦人科の小林裕明教授(56)が取り組む手術は、子宮に胎児がいる状態で頸がん部分を切除し、子宮と膣をつなぎ直す。3例中1例は無事出産し、1例はまだ妊娠中だが、術後も母子ともに順調だ。

り、術後も早産しやすくなるなど危険性が非常に高く、国内外合わせて30例ほどの報告しかないという。

福岡市の中村若菜さん(40)は15年8月にこの手術を受け、10月に長男駿太ちゃんを出産した。妊婦健診で子宮頸がんだと分かり、福岡県の病院で「妊娠の継続は難しい」と言われたという。「シヨックだった。どうしても赤ちゃんをあきらめきれなかった」と、全国の病院を訪ね、小林

鹿大・小林教授、臨床試験で成功



教授にたどり着いた。小林教授から「開腹後、予想以上に進行していたら子宮を摘出するので、赤ちゃんをあきらめてください」と説明されたが、「少しでも望みがあるなら」と手術を決意した。手術は成功し、胎児も無事だった。その後、帝王切開で出産した時に子宮も摘出し、抗がん剤治療を経て退院し

た。「元気に産まれ、成長しているのがうれしい」と笑顔で語る。

鹿児島市の女性(35)も、妊婦健診で子宮頸がんが判明し、7月に手術を受けた。現在妊娠6カ月で順調に経過している。「子どもを助けられるならと手術を決めた。子宮頸がんは自覚症状がない。普段から検診に行くべきだった」と話す。

小林教授によると、妊娠中に初めて子宮頸がんと診断される患者は増えてきており、この手術の需要は今後ますます増えることが予想される。とはいえ、「母子ともにリスクが高い手術なので、実施は慎重に判断する必要がある」と話す。

「子宮頸がんは予防と早期発見が重要。むしろこのような手術をしないで済むよう、定期的に検診してほしい」と呼び掛ける。

(川畑美佳)